

# 図画工作の指導者育成におけるモダンテクニックの活用と効果

中西亨

帝京科学大学教育人間科学部こども学科

Application of the Modern Technique to the Training of Teachers of Arts and Crafts and Its Effectiveness

Akira NAKANISHI

キーワード：図画工作、美術、教育、モダンテクニック、教育者・保育者の養成  
Keywords : Arts and Crafts, Art, Education, Modern Technique, Training of Preschool and Elementary School Teachers

## 1. はじめに

図画工作は、学校教育法に定められる小学校の教科として、子どもたちに学ばれている他、幼稚園や保育園などの幼児教育でも表現の一つとして、子どもたちに学ばれている。しかし、図画工作は、美術を専門に学んだ保育者や教師が担当するとは限らず、指導や援助に戸惑う者も少なくないという<sup>1)</sup>。そのため、初等・幼児教育の指導者を育成する教育機関(大学など)での、図画工作の指導法に関する教育の役割は大きく、深く考える必要がある。

こうした初等・幼児教育の指導者育成を担う大学で、実際に図画工作に関する教育を担当すると、美術への苦手意識を持っている学生が何割かいることに気付く。これらの美術への苦手意識は、初等・幼児教育の現役の指導者においても少なくないとの報告もあり<sup>2)</sup>、苦手意識が描画指導を消極的にする一つの要因として考えられている<sup>3)</sup>。そのため、初等・幼児教育の指導者を志す学生に、図画工作に関する教育を行う時には、まず、美術に対する苦手意識を無くす方法を考える必要があるだろう。その手段として考えたのが、描画技法の一つであるモダンテクニックを活用した教育である。苦手意識を形成する理由の一つとして「絵をうまく描けないから」と挙げられている<sup>2)</sup>。モダンテクニックは、具体的なモノの形を写實的に描くのが苦手でも、偶然にできる形や色を利用した表現ができるため、美術に対する苦手意識を軽減する有効な方法の一つだと考え、図画工作の指導法に関する科目で取り入れた。

また、保育者や教師の描画指導が消極的になってしまう要因として、図画工作の具体的な指導法がわからないことも挙げられている<sup>3)</sup>。図画工作を子ども

に指導する時には、小学6年生と幼稚園児では表現力に差があるため、年齢に合った表現方法を示す必要があり、そのためには多様な知識や技術が必要となる。モダンテクニックは、様々な画材を用い、様々な技法により表現するため、多くの基礎的な知識や技術を身につける有効な方法と言えることから、図画工作の指導法に関する科目で取り入れた理由である。

このような考えにより実践した教育の取り組みを、図画工作の指導者育成におけるモダンテクニックの活用と効果として考察していく。

## 2. 対象と方法

### 2-1 対象

初等・幼児教育の指導者育成を担う学科に、平成29年度入学の大学1年生24名(男子16名、女子8名)が履修した図画工作の指導法に関する科目で、本教育に取り組んだ。

### 2-2 方法

この図画工作科目は、通年30回、毎回1コマ(90分)の科目だが、モダンテクニックを活用した本教育は、その中の前期15回の授業で行った。

ここで取り上げたモダンテクニックとは数種の技法の総称であり、それぞれの技法については表1の通りである<sup>4)</sup>。これらのモダンテクニックの技法を活用し、図画工作の指導者育成に必要と考える、苦手意識の軽減と、多くの基礎的な知識や技術の習熟を目指した本教育は、表2のように授業を計画して実践した。全体を通して実技を中心とした授業構成とし、第1～8回の授業では各自で制作に取り組む

個人制作を、第9～13回の授業では3名1組によるグループ制作を、そして、第14～15回は再度個人制作による授業を行った。また、モダンテクニックの各技法は、それぞれのやり方を覚えるだけでは指導者になった時に展開していきにくいと考え、技法ごとにテーマを設定した。それにより、技法の習得だけでなく、表現の導き方も制作を通して経験できるため、子どもたちへの指導に応用していける実践的な教育を試みた。

本教育の分析と検証の方法としては、初めに学生の美術に対する苦手意識を把握するために、アンケートによる調査を行った。そして、各授業では学生それぞれが学習内容を記録するために、タイトル、目的、準備するもの、手順、気付いたことや感想、と

いった項目でノートを取り、制作した作品と共にファイルしてもらった。その中の「気付いたことや感想」からは学生の声が読み取れ、「制作した作品」からは成果が見られる。また、学生には最後、グループ制作による作品と、個人制作の中から印象深かった1作品についての制作意図と感想を書いてもらったことで、全体を通じた教育の影響が読み取れる。これらのアンケート、ノート、作品、レポートにより、図画工作の指導者育成におけるモダンテクニックの活用と効果を分析し、検証していく。尚、すべての対象者には本研究の趣旨や個人情報保護、匿名性保障について説明し、教育結果を使用することに対して同意を得て実施した。

表1. モダンテクニックの技法

|                                 | 技 法                                | 内 容  |
|---------------------------------|------------------------------------|--|
| モ<br>ダ<br>ン<br>テ<br>ク<br>ニ<br>ク | パチック                               | クレヨンや油絵具など油性の画材で描いた上に、水彩絵具などの水性の画材を塗ると、はじきによる色彩の効果が得られる描画技法。         |
|                                 | スクラッチ                              | 下塗りした色の上に、他の色を重ねて塗り、上の色を引っ掻くと下の色があらわれる描画技法。                          |
|                                 | デカルコマニー                            | 紙などに絵具を垂らし、乾かないうちに二つ折りや他の紙などで圧力をかけることで、絵具が押しつぶされて偶然にできる形や濃淡を求める描画技法。 |
|                                 | フロッタージュ                            | 凹凸のある素材の上に紙を重ね、上から鉛筆やコンテなどでこすり、形を浮き立たせる描画技法。                         |
|                                 | スパッタリング                            | 目の細かい網の上で絵具をブラシでこすることによって、霧状になった絵具をかける描画技法。                          |
|                                 | スタンピング                             | 凹凸のある素材に絵具をつけて、それを紙などに押し（スタンプして）写し取る描画技法。                            |
|                                 | にじみたらし込み                           | 紙などに水や絵具を塗って濡らし、乾かないうちに別の色を乗せてできる色のにじみを活かす描画技法。                      |
|                                 | ドリッピング                             | 筆や刷毛にとった絵具を、紙などに滴らせたり、それを息で吹いたりして描く描画技法。                             |
|                                 | マーブリング                             | 水よりも比重の軽い絵具を、水槽の上に垂らして浮かべ、そこにできた模様を紙に写し取る描画技法。                       |
| コラーージュ                          | 画面に、断片化された別の素材、特に既製品の一部などを貼り付ける技法。 |  |

表2. 授業計画

| 回数 | 課 題  | 内 容  |                                     |
|----|--|--|-------------------------------------|
| 1  | ガイダンス  | 教員紹介、カリキュラム説明、アンケート                                      |                                     |
| 2  | モ<br>ダ<br>ン<br>テ<br>ク<br>ニ<br>ク<br>を<br>活<br>用<br>し<br>た<br>表<br>現 | パチックを活用して「空のある景色」をテーマに個人制作                               |                                     |
| 3  |  | スクラッチを活用して「模様集め」をテーマに個人制作                                |                                     |
| 4  |  | デカルコマニーを活用して「何に見える？」をテーマに個人制作                            |                                     |
| 5  |  | フロッタージュを活用して「大きな木」をテーマに個人制作                              |                                     |
| 6  |  | スパッタリング・スタンピング・にじみたらし込み・ドリッピング<br>を活用して「水中世界」をテーマにグループ制作 | 課題説明、技法と用具の説明、制作                    |
| 7  |  |  |                                     |
| 8  |  |  |                                     |
| 9  |  | マーブリング・コラーージュを活用して「おかしなこと」をテーマに個人制作                      | 課題説明、技法と用具の説明、制作、<br>ノート・作品・レポートの提出 |
| 10 |  |  |                                     |
| 11 |  |  |                                     |
| 12 |  |  |                                     |
| 13 |  |  |                                     |
| 14 |  |  |                                     |
| 15 |  |  |                                     |

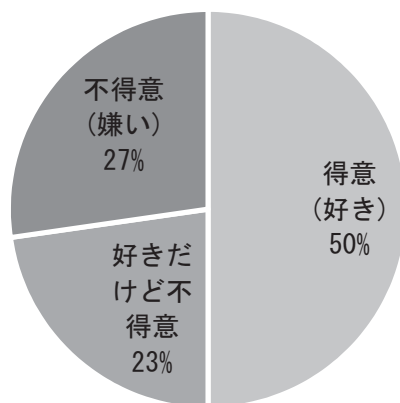


図1. 美術の得意・不得意  
初等・幼児教育の指導者を志す大学生

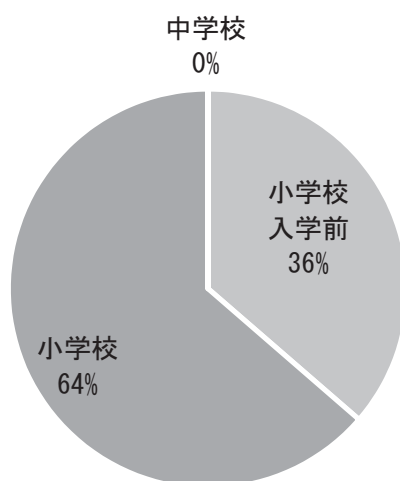


図2. 美術が得意になった時期  
美術が得意(好き)と回答した初等・幼児教育の指導者を志す大学生

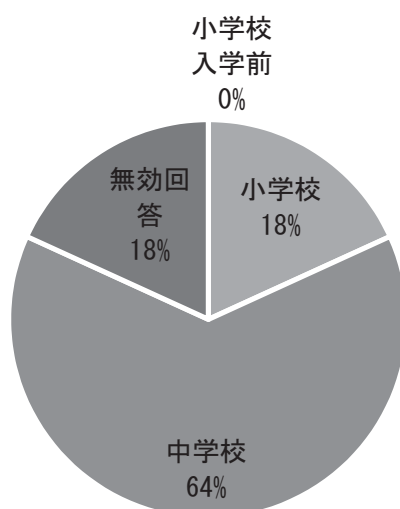


図3. 美術が不得意になった時期  
美術が好きだけど不得意・不得意(嫌い)と回答した初等・幼児教育の指導者を志す大学生

### 3. 結果

#### 3-1 美術への苦手意識

本教育を始めるにあたり、初等・幼児教育の指導者を志す学生の、美術に対する苦手意識を把握するために行ったアンケートの項目と結果は次の通りである。

「図画工作・美術は得意(好き)でしたか?それとも不得意(嫌い)でしたか?」得意(好き)50%、好きだけど不得意23%、不得意(嫌い)27%(図1)。この結果から、学生の半数が美術を不得意に思っていることがわかる。不得意と分類した中でも“好きだけど不得意”と回答した学生は、制作が上手いかなが意欲はあり、“不得意(嫌い)”と回答した学生は、制作が上手いはず意欲も湧かない、という2パターンあることがわかった。

「図画工作・美術が得意(好き)・不得意(嫌い)になった時期はいつ頃からですか?」美術は得意と答えた学生では、小学校入学前36%、小学校64%、中学校0%(図2)、美術は不得意・好きだけど不得意と答えた学生では、小学校入学前0%、小学校18%、中学校64%、無効回答18%(図3)。こうした結果から、美術に得意(好き)という意識を抱き始めるのは、小学校や小学校入学前ということがわかり、初等・幼児教育における図画工作の指導者の役割の大きさが認識できる。また、不得意という意識を抱き始めるのは、中学校が多いため、初等・幼児教育では美術の基礎づくりという観点も持って指導する必要があることがわかる。

#### 3-2 バチックを活用した授業

バチックを活用して「空のある景色」をテーマに個人制作をする課題とした。初回授業のため、まずは描画技法の中にモダンテクニックと総称される数種の技法があることを説明し、本課題で用いるバチックについては、制作してきた参考作品を使って示した。それにより学生は、「技法をもっと知りたくなった」と感想をノートに記していることから、興味や関心が育まれたことが読み取れる。

次に、クレパスとクレヨンの描画上の違いを表で示し、それぞれの特性を伝えて、バチックにはクレパスが適していることを説明したことについては、「クレパスとクレヨンは呼び名が違うだけと思っていたが、原料となる油分の含有量などの差による描画上の違いに驚き、新鮮でたのしく制作できた」と気付いたことを記しており、表現と画材の関係性を意識する機会になったことがわかる。



続いて、水彩絵具の手法や特性を習得する手引きとなる図4のワークシートを、学生に作成してもらおうと、「筆をどう使うかで表現の仕方が変わってきた」「色が重なることで別の色が生まれた」と気付いたようだ。

そして、色彩の基礎として色の三属性（色相・明度・彩度）をプリントの配布により伝え、手順を実演によって説明した後、学生は制作に取り組んで図5のように作品を完成させた。こうした制作を通して学生は「先生の実演を見て、クレパスが水彩絵具を本当に弾いたので驚いた」と感想を記している。その他、「空だったら青といった色だけではなく、違った色を入れることで表現がおもしろくなった」「水彩絵具では水を多めにすると、他の色と混ざり合って、思いがけない良い色が生まれた」という発見も見られた。また、「パチックは絵具で全てを描く表現とは違い、クレパスの線や色の濃淡を活かすことができたとのしかった」「クレパスの上に水彩絵具を塗ると、しっかりと弾いておもしろかった」というパチックの技法だけではなく、その魅力も含めて習得できたことが読み取れる。しかし、「絵心がないと大変」という感想もノートにはあり、テーマが“空のある風景”ということから写実的に描かねばというプレッシャーを感じたのかもしれない。

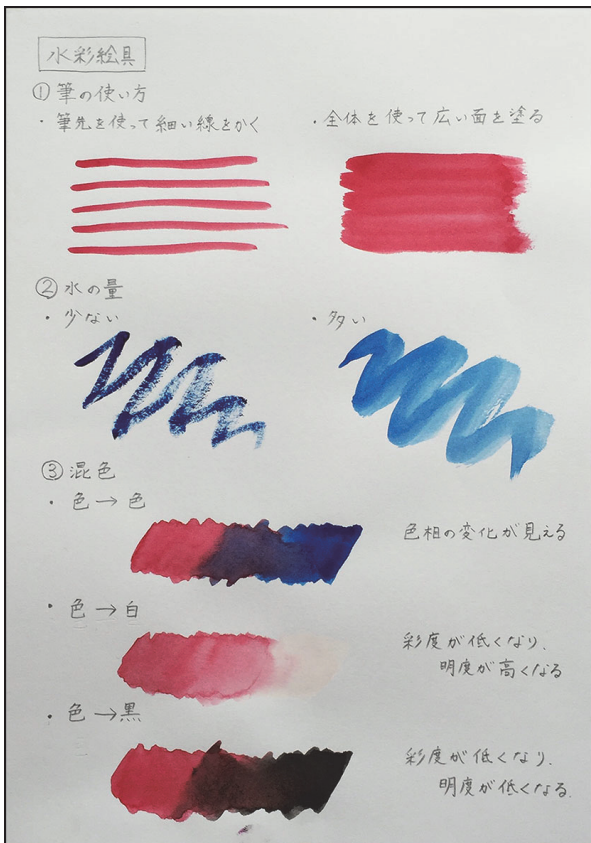


図4. 水彩絵具のワークシート



図5. パチックを活用した学生作品

### 3-3 スクラッチを活用した授業

スクラッチを活用して「模様集め」をテーマに個人制作をする課題とした。本課題で用いるスクラッチについて、まずは制作してきた参考作品を使って示し、制作手順は実演を交えて説明した。テーマである“模様集め”については、参考資料としてマリメッコ（フィンランドのアパレルブランド）のポストカード100種を自由に見られるようにした。しかし、学生の感想には、「模様を考えるのが大変だった」とあり、テーマの導き方をもう少し丁寧に示す必要があったことを感じるが、「模様を考えるのが大変だったが、直感で描けて良かった」という感想もあり、与える情報の量や方法の重要性が実感できた。

次に、クレパスの手法や特性を習得するための図6のワークシートを学生に作成してもらった。それにより学生は、「クレパスを重ね塗りする場合、暗い色から明るい色の順で塗ると混色でき、明るい色から暗い色の順で塗ると色が混ざらないことが、スクラッチの技法につながっている」と気づきをノートに記している。また、「クレパスの使い方の指導法がわかった」とあり、子どもへの指導に実践していける力が育成されたことがわかる。

続いて、アクリルガッシュを使うにあたって、他の絵具との違いを表で示し、スクラッチで引っ掻くのに使える用具をいくつか紹介したところ、「引っ掻く用具によって、それぞれの表情が出て良かった」と表現の幅の広がりを実感できたことが読み取れる。また、「引っ掻く用具は尖っているので、子どもたちに指導する際は注意が必要だろう」という気づきからは、指導に向けての積極性の芽生えが読み取れた。

そして、学生には制作に取り組んでもらい、図7のように作品を完成させた。こうした制作からは、「画面全部を塗りつぶすのが大変だった」という感想

がある一方、「根気が必要だったが、そのぶん達成感があった」という成果も見られる。その他、「スクラッチは絵の上手い下手に関係なく、誰でも楽しめる技法だと思った」とあり、美術を苦手に思っている、意欲的に取り組める要素を持った技法ということがわかる。



図6. クレパスのワークシート



図7. スクラッチを活用した学生作品

### 3-4 デカルコマニーを活用した授業

デカルコマニーを活用して「何に見える？」をテーマに個人制作をする課題とした。まず、制作してきた参考作品と、参考資料として用意した瀧口修造(1903~1979年)の作品を使って、デカルコマニーと本課題について説明し、制作手順は実演を交えて示した。本課題でのデカルコマニーは、用紙を半分に折ってつくるもの、半分に折った用紙を好きな形にハサミで切ってつくるもの、透明フィルムを重ねてつくるものと3パターン考え、そこで用いるハサミについては、図8のワークシートを作成してもらうことで基礎の習得を試みた。それにより学生は、「ハサミで曲線を切る時は、紙を動かすと切りやすかった」と気付いたことをノートに記している。

続いて、本課題のベースとなるデカルコマニーの制作に取り組んでもらうと、「押し広げた時に混ざってできる色を考えながらやるのがたのしかった」「色同士が交わるところが綺麗で、またやりたいと感じた」と偶然できる色の変化の美しさに気付いたことが記されている一方、「綺麗な色でも混ざると汚い色になってしまった」という感想もあった。そのため、3原色に触れた指導も加えた方がよかったことが読み取れる。

次に、デカルコマニーによって生まれた模様から何に見えるかイメージして線を加え、図9のように作品を完成させた。こうした制作を通して、「小さな子どもでもたのしめそう」「絵が下手な人や、図工が苦手な人でも、上手くできるのがこの課題の良さだと思う」と感想があり、成果を実感しやすく広げたのしめる技法ということがわかる。そして、学生の作品から何枚か選んで全員で鑑賞すると、「友人の作品から良い点が学べ、色々な発想方法があることがわかった」とあり、出来た模様が何に見えるか人それぞれだったことから、発想や想像について学ぶ機会となったこともわかる。



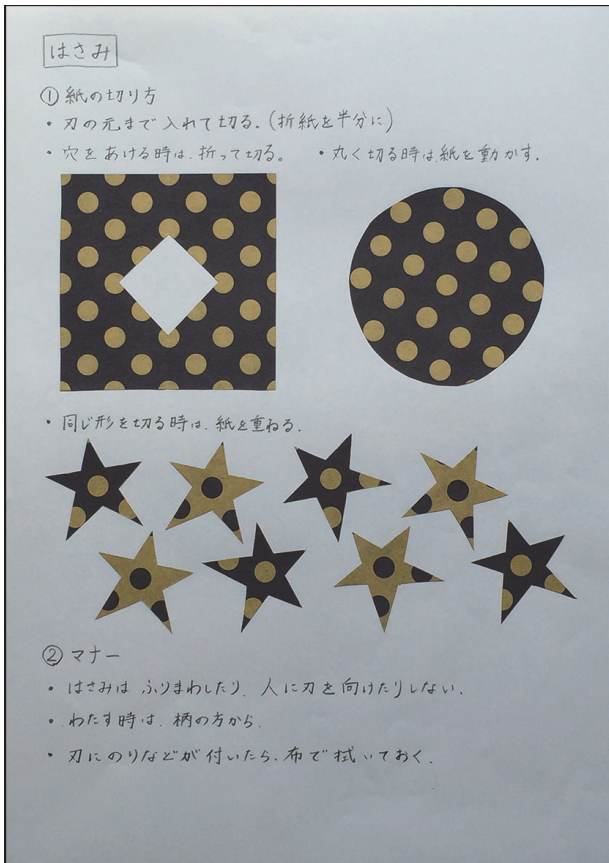


図 8. ハサミのワークシート



図 9. デカルコマニーを活用した学生作品

### 3-5 フロッタージュを活用した授業

フロッタージュを活用して「大きな木」をテーマに個人制作をする課題とした。始めに、フロッタージュの理解のため、マックス・エルンスト（1891～1976年）の作品と、制作してきた参考作品を観てもらった。そして、本課題で行う葉をフロッタージュしてテーマである“大きな木”の形に切り抜き、色画用紙に貼る工程は実演を交えて説明した。それにより学生は、「葉のこうした使い方を初めて知って興味が湧いた」と記している。また、本課題では大きな木の形に切り抜く際、カッターナイフを使うのだが、切れ味を維持するために刃を折ったことがあるか尋ねると、約1割の学生が未経験と答えた。そのカッターナイフの刃の折り方を指導して全員に折る練習をしてもらい、図10のワークシートに取り組みでもらうと、「カッターナイフの使い方が難しかった」「カッターナイフにあまり慣れてなく、曲線を切るのが特に難しかったので練習したい」という感想があり、こうした訓練の機会を設ける必要性が改めて実感できた。また、刃物を扱う際の安全指導は、指導者になった時に必要不可欠なため、「カッターナイフの適切な使い方が理解できたので指導する際に活かしていきたい」という言葉からは、安全に対する指導力も育めたことがわかる。

続いて、フロッタージュする葉を集めてくる時間を取ると、「葉を集めに行くところからたのしかった」というように、材料を自分で集めることにも効果が生まれることがわかった。そして、図11のように作品を完成させると、「同じ葉でも色鉛筆でフロッタージュする時、筆圧によって違う葉に見え、色を変えるとパターンも増えて面白くなる」「明るい色より暗い色の方が、よくフロッタージュできた」という気付きがあり、「葉で表現できる面白さ、その他いろいろなものをフロッタージュできる楽しさを、子どもたちに伝えていきたい」という感想から、技法の特性を掴み、指導に向けての積極性が生まれたことがわかる。最後に、学生同士の作品を見せ合う時間を取ると、「自分には思いつきそうにない様々な木が見られた」とあり、鑑賞教育の必要性を実感できたことが認識できる。



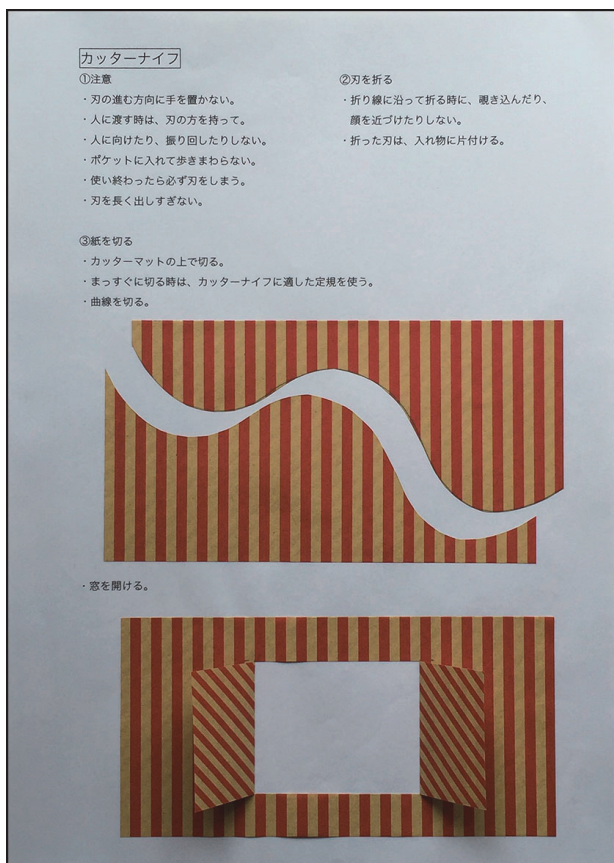


図 10. カッターナイフのワークシート



図 11. フロッタージュを活用した学生作品

### 3-6 スパッタリング、スタンピング、にじみたらし込み、ドリッピングを活用した授業

4つのモダンテクニックの技法を活用して「水中世界」をテーマに、3名1組でグループ制作をする課題とした。用紙のサイズはh600w1400 (mm)とし、5回の授業で行った。グループ制作を取り入れた理由としては、一人では実現できそうにない大きな作品や時間を費やす作品を、協力して成し遂げる経験も子どもたちには必要と考え、その経験を指導に活かしてほしいとの思いからである。まず始めに、それぞれの技法とテーマを理解してもらうため、技法ごとに描いてきた水中世界の参考作品を示して説明した。それにより学生は、「先生が描いてきた参考作品が魅力的だったことから、しっかりと技術を身につけて、同じように興味を持ってもらえるような授業ができるようになりたいと思った」「スパッタリングを使った参考作品を観たら、とても綺麗でやってみてみたいと思った」という感想をノートに記しており、参考作品を用意したことにより生まれた影響が読み取れる。

次に、グループ内でリーダーを決め、メンバーの発想を1つにまとめて制作イメージを共有するため、アイデアスケッチに取り掛かった。すると学生は、「メンバーそれぞれイメージが違うだろうと思い遠慮していたが、アイデアを聞くと共感できるものばかりでスムーズに決まり、意見を出し合うことの大切さがわかった」と記していることから、個人制作とは違ったグループ制作の利点を実感したことが読み取れる。

続いて、今回用いる4つの技法は、使う順番によって絵具が滲むことや、色が混ざってしまうこともあるため、どの技法から使ったら良いのか推奨する順序を伝えた。これを元に学生には、アイデアスケッチで描いたそれぞれの対象に、どの技法を用いるのか考えてもらい、どのような順序で進めていくか制作計画を立ててもらった。これにより、「計画を立てておくことでスムーズに制作が進んだ」「5回の授業で、技法を用いる順番も気にしながら制作を進めるため、計画性が身につくと思った」という感想が見られ、制作計画を立てることで全体が見通せるようになり、各技法の特性についても考える機会になったことがわかった。

その後、それぞれの技法による制作手順を一度に説明しても理解しづらいと考え、まずは初めに用いる、にじみたらし込みと、スタンピングを実演によって説明し、制作に取り組んだ。そして、残りのドリッ



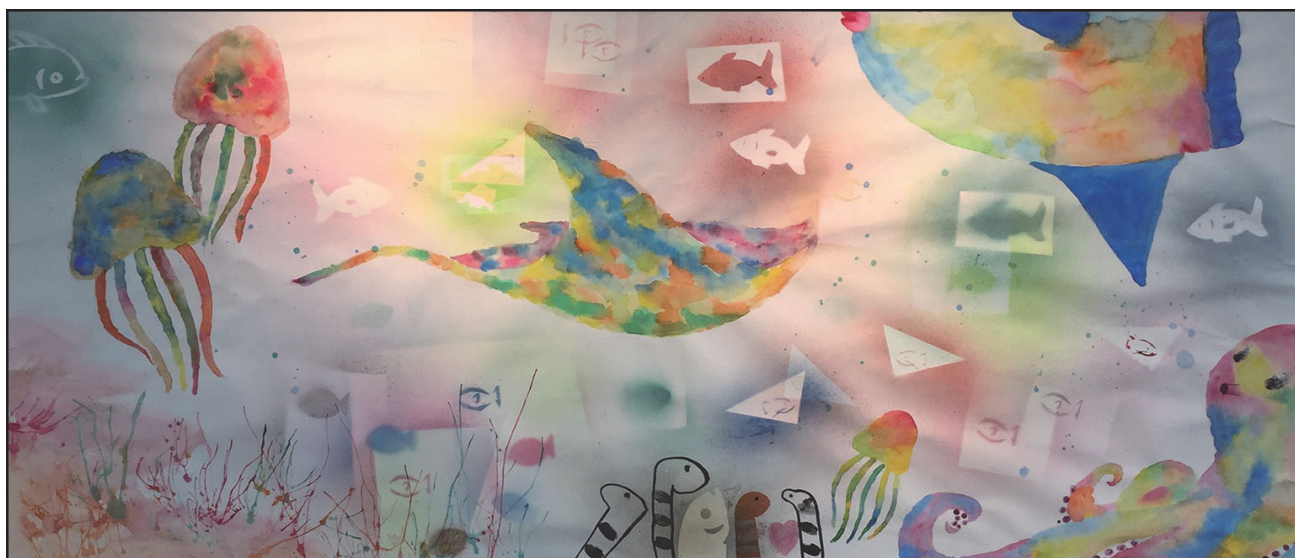


図 12. スパッタリング、スタンピング、にじみたらし込み、ドリッピングを活用した学生作品

ピングとスパッタリングも実演を交えて説明し、全体的に背景をどうするか悩んでいるようだったので描画例を示して、図 12 のように作品を完成させた。こうした制作を通して、「1つの画面に様々な技法を使うことで、絵に奥行きが出ることを学んだ」「いくつかの技法を使って対象を描くと表現が豊かになった」とあり、それぞれの技法を身につけると共に、技法を組み合わせることで生まれる表現の幅の広がりを感じ取れたことがわかる。

### 3-7 マーブリング、コラージュを活用した授業

マーブリングとコラージュを活用して「おかしなこと」をテーマに個人制作をする課題とした。まず、技法と本課題の理解のため、エリック・カール (1929 年～)、大竹伸朗 (1955 年～)、ハンナ・ヘッヒ (1889～1978 年) の作品と、制作してきた参考作品を観てもらった。それにより学生は、「参考となる作品を見せることで、子どもたちの想像力を幅広く引き出すことができると思った」と感想をノートに記しており、参考作品を見て感じたことから指導への展開を見出していることが読み取れる。また、「今回のような抽象的なテーマが子どもたちの考えを引き出すことができると思った」からは、テーマ設定によって子どもたちの学習に影響を与えられることに気付いたことがわかる。

続いて、コラージュの素材となるマーブリングの制作手順を実演により説明し、学生に取り組んでもらうと、「色の組み合わせ方で、全く違った表情のマーブリングが仕上がった」「竹串などで混ぜるだけではなく、息を吹きかけて大らかな模様ができるよ



図 13. マーブリング、コラージュを活用した学生作品

うに工夫した」というように、表現の発見が技法の習得につながっていく様子が認識できる。

その後、コラージュの制作手順を実演により説明し、素材となる印刷物を集めてマーブリングと共に制作に取り組み、図 13 のように作品を完成させた。学生の中には、「コラージュでは貼る順番や位置が難しく苦戦した」という感想もあったが、制作はイメー



ジを膨らませながら試行錯誤して取り組むものなので、しっかり作品と向き合えた結果とも受け取れる。また、「全く違ったイメージのものを組み合わせることで面白い作品になり、たのしく制作できた」という気付きからは、コラージュ表現の特性を的確に捉えていることが確認できる。

#### 4. 考察

図画工作の指導や援助に戸惑う保育者や教師も少なくないという現状から、指導者を育成する大学での教育の役割の大きさを感じ、問題の原因と考えられる美術への苦手意識と、知識や技術不足を打開すべく、モダンテクニックを活用した教育を試みてきた。

まず、学生の美術への苦手意識を把握するためアンケートを取ると、半数が美術を不得意と認めていることがわかり、このままでは多くの学生が指導者になった時に戸惑うことが予想できる。そして、残りの半数の学生は小学校または小学校入学前に美術が得意になったと回答していることから、図画工作教育の影響の大きさがわかり、改めて、初等・幼児教育の指導者育成に係わる大学が重要な役割を担っていることを確認できた。

また、美術を不得意と答えた学生の中でも、“好きだけど不得意”という回答からは、美術への意欲はあるが、知識や技術不足が原因で苦手意識を招いていることが明確になったといえ、“不得意(嫌い)”という回答からは、美術の魅力を実感できるような体験が不足してきたことにより苦手意識を招いていることがわかる。

こうした問題に働きかけるため、モダンテクニックを活用した教育を試みてきたわけだが、モダンテクニックは様々な画材や用具を使い、様々な技法により表現するため、指導する際には多くの工夫が必要となった。例えば、参考作品や参考資料の提示、ワークシートの活用、制作手順の実演、技法ごとのテーマ設定、技法を活用した作品制作などがある。

これらを通して行ってきた教育結果からは、学生が多く知識や技術を身につけていることが読み取れ、各技法の魅力を感じ取りながら制作に取り組んでいたことがわかった。また、将来こうした指導法を応用していきたいという展開が見て取れたことも、大きな成果といえるだろう。よって、モダンテクニックを活用した教育は、図画工作の指導者育成における問題を解決に導く有効な教育手段であると考えられる。

しかし、パチックを活用した授業を行った際、テーマから写実的な表現をイメージして、一部の学生が「上手く描かねば」とプレッシャーを感じたようだ。こうしたプレッシャーは、苦手意識や、図工・美術嫌いの意識を芽吹かせかねない<sup>2)</sup>といわれるため、指導する際には十分に考慮して授業を進めていかなければならない。

本教育では、表現の楽しさや面白さなどの魅力を学ぶことが、美術への苦手意識を軽減し、知識や技術を身につけるための興味や関心につながっていくことがわかったため、今後の課題としては、今回のような描画による平面表現の指導の展開と向上を目指すと共に、立体表現でも効果的な指導者育成の教育方法の考案を目指していきたい。

#### 引用および参考文献

1. 島田由紀子：幼児、児童のメソッドによる描画指導法の研究, *和洋女子大学紀要*, 57: 87-96, 2017.
2. 降籙孝：学校現場における図画工作教育の課題—教員免許状更新講習の実施・考察から—, *美術教育学 美術科教育学会誌*, 32: 393-404, 2011.
3. 青陽結, 高橋敏之：幼児の描画活動におけるキャラクター表現の受容と指導, *美術教育学 美術科教育学会誌*, 35: 315-326, 2014.
4. 益田朋幸, 喜多崎親：*岩波西洋美術用語辞典*, 岩波書店, 東京, 2005